
想う悪魔

北極星のなりそこない

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

想う悪魔

【Nコード】

N0723I

【作者名】

北極星のなりそこない

【あらすじ】

それはサイコロ型の世界の第五面での事。人の欲から生まれた化け物、「想う悪魔」。各々の欲に従い行動する彼らは、人から生まれたはずなのに人の敵になった。人に害する彼らを打ち滅ぼすために誕生したのが「悪魔の狩人」。想う悪魔を狩る彼らは、畏敬の念をもって迎えられた。ここにもそんな、悪魔の狩人をする若い女性
が一人…… この作品には同性愛要素が含まれます

A n e c d o t e . 0 0

おじいちゃんが好きだった。おじいちゃんのしわだらけの手とか、傷跡だらけの背中とか、そういうのが好きだった。

おじいちゃんは冬になるとよく、暖炉の前でお話をしてくれた。

遠い別の国のお話、この辺り以外の場所のお話、綺麗な女の人のお話、——想う悪魔のお話。

おじいちゃんは悪魔の狩人だった。人に害をなす、そういう悪魔とか化け物とかを狩るお仕事をしていた。おじいちゃんが刀を振るうと大きな獣でさえ絶命する。そんな時のおじいちゃんは、最高にかっこよかった。（それを言うとおじいちゃんは「もつと女らしく育ってくれば……」って残念がるんだけど）

「想う悪魔って言うのはな、結局は人なんだよ」

あたしの頭をしわだらけの手で撫でながら、独り言のようにおじいちゃんが呟く。パチパチと弾ける炎が好きだったけど、覗き込むと危ないからって近寄らせてはもらえなかった。

「人の欲から想う悪魔が生まれる。生まれた想う悪魔は自分の欲に従って行動する」

姦淫とか暴食とか暴力とか。時々おじいちゃんの仕事を手伝うけれど、想う悪魔は醜い。

「理性で取り繕っているだけなんだと思い知らされるよ」

人間は理性で欲望を押さえ込んでいるだけ。醜くなりたくないから何とかしてるだけ。理性がない想う悪魔が人に害をなすのは当たり前。だから人が想う悪魔を殺すのは当たり前。

おじいちゃんはしょちゅうそんな事を言っていた。

多分おじいちゃんは嫌だったんだろう。想う悪魔の中にはたまに良い人もいるみたいだったから、そういうのまで殺しちゃうのが。だから納得させたかったんだと思う。他の誰でもないおじいちゃん自身を。

あたしには、よく、分からなかったけど。

「皆が皆仲良く出来ればいいのになあ」

おじいちゃんの諦めにも似たその口癖がたまらなく嫌だったのはよく覚えている。

結局おじいちゃんはあるあたしが十五になったその年の冬に自殺してしまった。その理由が何なのか、あたしは今も分からないでいる。

A n e c d o t e . 0 1

そんな、懐かしい夢を見た。

「ハークさん、ハークさん」

「んんー……？」

肩をゆする華奢な手で目が覚めた。ぼんやりとした頭を振り、額をこすりながら身体を起こす。

「あの、センターから連絡来ました、起きて下さい。ご飯の用意してますから」

「んー……」

寝ぼけた頭では上手く考えられない。自分を起こしに来てくれた相棒に生返事をする。彼女は伝わったと思ったのか、ぱたぱたと部屋を出て行った。

がしがしと後頭部を掻き、窓のカーテンを開ける。薄っぺらいカーテン越しに差し込んでいた朝日がもろに顔に当たり、思わず目を閉じた。

「……何か、懐かしい夢見たなあ……」

ぼつりと呟く。もう六年も経ったのだと思うと途端に寂しくなった。掘り起こされた感傷に自分の事ながら苦笑してしまう。

「こんなんじやおじいちゃんに笑われちゃうなあ」

いい加減覚醒してきた頭を振り、安いベッドから降りた。ひんやりとした鉄の床を歩き、クローゼットからいつもの服を取り出す。無地のＴシャツに半ズボン。色気もそっけもないそれを着て、鏡の前に立った。

蒼色の長い髪、群青色の目をした女性。毒にも薬にもならなさそうな表情の自分が映っていた。

手早く髪をまとめると高く結った。いわゆるポニーテールという奴だ。仕事の時に邪魔になるからこうしているのだが、そろそろ切ってもいいかもしれない。バツサリいけばかなり軽くなるだろう。

そろそろ朝食の準備も整っている頃だろう。台に置かれた刀を手に取り、部屋を後にした。

女性——ハークの育ての親が亡くなってもう六年にもなる。あの頃十五だった少女は二十一の女性になっていた。まあ、見た目はほとんど変わっていないのだが。特に体格は少し背が伸びたぐらいで太りも痩せもしなかった。

「おじいちゃん」と呼び慕っていた彼は、十五のハークを残して自殺してしまった。理由は知らない。分からない。彼は物以外の財産——例えば遺言とか——を一切遺さなかったからだ。

財産の内の一つが、ハークが住むこの家だった。居間と小さな部屋が三つあるだけのこじんまりとした住居だが、それで充分だった。同居人は一人しかいないから部屋が余っているくらいだ。

そして、ハークが気に入っているもう一つの財産がこの刀だった。想う悪魔と呼ばれる化け物を狩る、悪魔の狩人だった「おじいちゃん」。そんな彼の武器が刀だった。「おじいちゃん」が自殺に使ったのもこれだったりする。

きつと色々な意味で人生を共にした物なのだろう。最期を迎えるのに使ったのも何かしら思い入れがあつての事に違いない。

同時に、ハークにとっては憧れの象徴だった。何度か彼が想う悪魔を狩るのに付き合つた事があるが、そんな時見る「おじいちゃん」は最高に格好良かった。

視線だけで相手を殺してしまえそうな殺意。鞘におさめられた刀。光が閃いたかと思うと、対峙していた想う悪魔が塵の如くバラバラになって、殺害されるのだ。

いつかあの技を教えてもらいたい。そう思っていたのだが、教えてもらう前に「おじいちゃん」は死んでしまった。少しがっかりしながらも、我流で彼を越えようと思ひ刀を取り、彼の生き様を継ぎたいと悪魔の狩人になった。

——それを「おじいちゃん」が望んでいたのかは分からない。し

きりに「もう少し女らしく」とか言っていた事を思うと望んでいなかったかもしれない。けれどはっきりと言い残さなかった「おじいちゃん」が悪い。と思う。

居間に来るとふわり、と鼻腔をいい匂いがくすぐった。

「アマンダ、おはよー」

「おはようございます、ハークさん」

さつき出来なかった朝の挨拶をすると、同居人がこちらを向いてにつこりと笑った。茶色の三つ編みが軽く揺れて、明茶の垂れ目あけぢやが細められる。細いハークとは対照的に丸みを帯びた身体は女性的で、どこか包容力を感じさせた。

アマンダ。ハークの同居人で、悪魔の狩人としての相棒だ。

「今日の朝ごはん何ー？」

「目玉焼きとウインナー、それからトーストです」

いつものメニューだ。好きな物ばかりなので文句は言わない。「いただきます」と手を合わせてから、バターを塗ったトーストに噛り付いた。

「それで、センターから連絡があつたんだって？」

「あ、はい……お仕事だそうです」

アマンダの表情は優れない。具合が悪いのではなく、単純に仕事が苦手なのだ。

センター——ハーク達、悪魔の狩人が所属する組織だ。小規模な自治組織が多く、まとまりがないこの第五面において数少ない大規模な組織でもある。

悪魔の狩人の仕事はセンターによって一元管理されている。所属している狩人にこなせそうな仕事があると連絡が来るのだ。悪魔の狩人の実力も想う悪魔の強さもピンキリで、弱い悪魔は弱い狩人に、強い悪魔は強い狩人に倒させるというのがセンターの方針らしい。

ハーク達は中堅と言ったところだ。想う悪魔は強さに応じてEからSSまで七段階にランク分けされているのだが、ハークのところ

に来る討伐依頼はBがしょっちゅう、Aがたまに、S以上は全然こない。(そもそもSランク以上の想う悪魔が少ないというのもあるのだが)

「おじいちゃん」はSランクの討伐依頼も来る凄腕だった。だからハークもそうなりたい、のだが。

「ランクは？」

「Cが一匹、だそうです。今動けるのが私達しかいないとか……」不安げにアマンダがため息をついた。

ハークの足を引っ張っているのは間違いなくアマンダの存在だった。彼女は悪魔の狩人のくせに戦いが苦手なのだ。いや、戦いというよりは、想う悪魔が、だろうか。

分からなくもない。同じ「食欲」の想う悪魔でもEとAでは大きく外見が異なる。Eは可愛い犬だったりするのだが、Aだと獰猛な肉食獣になり、さらに奇形へと変じている。普通の女性には恐ろしいだろう。

いい加減慣れてほしい。そう思いながらも口には出さなかった。

ハークは二十一、アマンダは十六。三年前から一緒に仕事をしているが、幼い頃から「おじいちゃん」について想う悪魔に慣れ親しんでいたハークと違い、アマンダはそれまで平和な孤児院で暮らしていた一般人だ。いやまあ三年も経つのならそろそろ慣れるとは思うが。

ただその恐怖感が大事だったりもする。幼い頃から慣れているからか、ハークはどんなに強い想う悪魔を見ても何も感じない。感覚が麻痺しているのだ。

そんな時アマンダがいると必要以上に突っ込まなくてすむ。アマンダがいなかった頃は怪我をする事もしょっちゅうだったが、守るべき存在がいるのだ、と思うと無茶も出来なくなった。「おじいちゃん」がたまにハークをつれて仕事をしていたのは、そういう理由もあったのかもしれない。

ハークは声を上げて笑った。

「大丈夫だよ、アマンダ。悪魔がアマンダを狙ってもあたしが守ってあげるって」

ハークの言葉にアマンダは微笑んだ。眉尻は下がったままで、困っているようにも見える。

「いつもすみません……早く慣れたいです」

「いいよいいよ。その内慣れればそれでいいって」

いつかもつと強い悪魔と戦う時に、逃げ出さず固まらない程度に慣れてくれれば、それで。

屈託なく笑うハークに、アマンダは困ったように微笑んだままだった。

A n e c d o t e ・ 0 2

朝食を食べ終わり、食器を片付け、二人は仕事に出た。センターから送られてきた情報を元にモノレールに乗り、目的地を目指す。ハーク達が住んでいるところからは少し遠い、山すそを。

一時間ほどモノレールに乗り、少し歩いて目的地に着いた。廃墟となった村の中央に居座る、大きな館。そこに今回討伐すべき想う悪魔がいる、らしい。

「誰もいませんね……」

「うん……そうだね」

館の中に入る前に、村の家々を見て回る。つい先日まで暮らしていた気配があるのに、誰もいない。

「避難しているんでしょうか？」

「だといけどねー」

想う悪魔が人里に現れるケースはよくある。そして、集落一つ滅ぼす事も、ままある。アマンダが言う通り避難しているのならいいのだが……

誰もいない事を確認してから、館の玄関の前へとやってきた。窓という窓は全て鎧戸から閉められていて、中を伺う事は出来ない。

「アマンダ、準備はいい？」

「は、はいっ」

「よし、なら行くよ」

ドアノブを回せば簡単に扉は開いた。館の中は静かで、扉から入る光以外に光源はなく、薄暗い。

「qqwqw wittr ewr」

アマンダが呪文を唱えると、手の平大の光の玉が現れた。存外明るいそれは室内を照らし出す。

「んー、どこにいるかなあ」

明るくなった室内を見回すが、思っていたよりも静かで綺麗だ。

調度品もそのまま、誰かが引越してそのままにしまったかのような感じた。

ふと床に目を落とす。

「ん……？」

すみれ色のカーペットに黒い染みのようなものがあつた。

「アマンダ、これ何だと思う？」

「え？ ……えっと、染み？」

「うん、それは見れば分かるんだけど」

しゃがみこんでよく見れば染みのある箇所だけ妙に毛羽立っている。点々とそれは続いていて、階段の上の方に続いているようだった。

「よし、これを追うよ」

「え……あ」

染みの正体の見当が付いたのだらう、アマンダの表情が曇つた。

おそらくは、血だ。何の血かは分からないが、きっと――

染みを追って館の中を進む。等間隔に続くそれを辿れば、館の奥、一際立派な扉の前についた。

ちらりとアマンダを見る。少々震えていたが、アマンダはこくりと頷いた。

ドアノブに手をかけ、一気に押し開いた。

「ひっ――！」

アマンダが息を飲む音が聞こえた。それに重なって、何かを咀嚼する音も。

一際豪華な内装のその部屋の中央に、大きな獣が一匹座り込んでいた。狼に似ているが、倍ほどの大きさで、足がカエルのように不自然に長かった。それはぐちゃぐちゃと何かを噛んでいた。

背中を向けていた獣がこちらを向く。もごもごと動く口から、白い骨が覗く人間の腕が――

確認する前に動いていた。鞘を後ろに放り投げ、刀を構える。アマンダが銃を構えた音が聞こえた。射線上に入らないように身体を

ずらし、獣に向かつて走り出す。

獣はぐばあと口を広げた。ぼとりと腕が床に落ちる。刃が毛皮を切り分ける直前、獣は後ろに跳ね飛んだ。

ぱんぱん。乾いた音を立てて弾丸が発射される。獣は器用に壁を蹴り、本棚を蹴り、それらをかわしていく。反動で本棚から落ちた本が積まれていた骨を折っていった。

舌打ちをした後、改めて刀を構える。人がいないのは当たり前だ、恐らく全員こいつに食われてしまったのだ。足元には先ほど殺されたばかりなのか、血を垂れ流す死体があった。

アマンダの弾丸が何度目かの空振りになる。獣は一度床に足をつけると、ハークに向かつて飛び跳ねてきた。妙に長い手が自分目掛けて伸ばされてくる。咄嗟にその場にしゃがみこみ、頭上目掛けて刀を振り上げる。

騒音が響いた。足を滑らせ、背中を見せないように立ち上がる。

振り上げた刃は致命傷こそ与えなかったが、当たったようだ。獣の左足の付け根からどろどろと黒い何かが溢れ出している。先ほどよりも敵意に満ちた視線がハークに向けられた。

再び獣がこちらに飛び掛ろうとする直前、ぱん、と音がした。再び騒音が上がる。今度は右足にアマンダの銃弾が入っていた。先程まで元気に跳ね回っていた獣は、痛みによってかざるすると床を移動する。

それが何だか哀れだなあ、と思った。

満足に動けずにいる獣に肉薄する。なおもこちらに突き出される腕を切り捨て、身体を蹴り上げる。よろめく獣の首を落とせば、獣はどろり、と黒い何かになり、床に溶けて消えた。

「ふう……何とかなったね」

刀に付いた何かを払い、投げ飛ばした鞘を拾っておさめた。アマンドは口元を押さえながらも部屋の中を見て回っている。

「どしたの？」

「……生きてる人がいないかな、って思ってた……」

言われて、考える。部屋中央の死体はかなり新しい。生存者がいる可能性はないわけではない。ものすごく低いだろうが。

ハークは苦笑するように息を漏らした。

「いいよ、探そっか。まだお昼まで時間あるしね」

「すみません」

頭を下げながらも、嬉しそうに顔を綻ばせるアマンド。可愛いなあ、とか思いながら、ハークは人がいそうな場所を考える。

「とりあえずこの部屋にはいなさそうだし、他のところ回ってみようか」

「はい」

ここには死者しかない。部屋の隅に積まれた白骨を見れば分かる。想う悪魔が「貯蓄」なんて事はしないだろうが、食われるかもしれないという状況上、被害者はどこかに逃げるはずだ。

まあ、逃げられる足があればとつこのとくにこの館から出ているだろうが。それは言わないでおく。

一つ一つ部屋を見て回る。質素だがセンスがいい応接間、それに豪華な客室、そこそ大きな食堂。どの部屋も黒い染みがある以外は驚くほど荒らされていなかった。

設備が整った台所の中を探していると、床に不自然な亀裂が入っている事に気が付いた。四角く、正方形に走っている。それも結構大きい、一メートル四方はあるだろうか。

「アマンドー」

「はい、何ですか？」

「これ、何だろう」

四角い亀裂を指差すとアマンドは少し首を傾げた。

「収納床、でしょうか」

「ここも見てみる？」

「あ、はい、お願いします」

収納床ならあるはずの取っ手を探す。が、どこにも見当たらない。

「……ぶち壊していいかな」

「あ、あはは……」

物騒な事を言い出すハークに、困ったようにアマンドは笑った。

とはいえ取っ手がなければ開けられない。壊すのもやむなしかと考えていると、アマンドが何かに気付いたように壁に駆け寄った。

「アマンド？」

「えっと、ここにスイッチが……」

壁に付けられた四角い突起につけられたボタンをぽちっと押すアマンド。途端、

「おお！？」

ウィーと機械音を立てて亀裂が開いた。どうやら機械の力で開くものだったらしい。道理で取っ手がないはずだ。

扉の下には階段が続いていた。ひんやりとした空気が流れ込んでくる。暗いその階段はかなり長く続いているようだ。

「ワインセラー、かな？ 入る？」

問いかけるとアマンドは頷いた。何となく頷き返して、階段を下りていく。アマンドの移動を追いかける魔法の光源が石造りの地下を照らす。

どのくらい下りただろうか。やがて、平らな床へと辿りつく。どうやら地下の貯蔵庫らしい。左右に木で出来た棚が置かれていたが、中身は空っぽだった。

「あれ……」

目を凝らす。奥に大きな影があった。手でアマンドを制し、自ら

は影へと近付く。

それは人だった。紫色の短髪が特徴的な、細い身体つきの男性。ぐったりとした様子で壁に寄りかかっており、こちらが近付いたのにも気付いていないようだった。

「もしもーし？」

声をかけてみるが反応はない。首に指を当ててみる。脈はあった。少し考えて、男性を背負った。——驚くほど軽い。この体格ならもう少し重くてもいいはずなのに。

「あの、ハークさん？」

「生存者いた。すぐく衰弱してるみたいだから、医者に連れて行く」

「え、あ、はい！」

刀はアマンドに預けて、男性を背負って階段を登る。

それにしても何故、あんなところにいたのだろうか。外に逃げたり何なり方法はあっただろうに。

疑問を抱いても男性はぐったりとしたまま、目が覚める気配もなかった。

それから三日が経った。特に仕事も来ず、鍛錬は欠かさぬようにごろごろしていたハークだったが、唐突に思い立って町へと来ていた。アマンダも誘ったのだが、

「すみません、ちょっと手入れしちやいたい機械があつて……」

と、断られてしまった。ちなみに目的は一切ない。家でごろごろするのに飽きたからちよつと散歩に來ただけだ。

直線的な町の中を進む。建物の素材は、他の面では自然素材やレンガ、石などが主流らしいが、第五面では鉄や鋼などの金属が主流だ。ハーク達が住む小屋は木で出来ているが、あれは例外だろう。

「おじいちゃん」に教えてもらったが、ここ、第五面では他の面よりも科学文明だか何かが発展しているのだそうだ。ハークは他の面に行った事がないのでよく分からないが、モノレールなどは第五面特有の物品らしい。

反面、魔法があまり重視されていない。魔法は人による相性が強いが機械はそうでもないからだろう。アマンダは簡単な魔法を使うが、ハークは魔法を習った事もなかった。一回アマンダに教えてもらってやってみたが、何も起こらなくて諦めた覚えがある。

そういえば「おじいちゃん」は魔法が好きではないと言っていた。何でも、よく分からない存在に力を借りるのが嫌だとか。魔法の原理から分からないハークとしては何であろうと使えない物は使えないだけなのだが。

そんな事を考えながら町を歩いていると、

「あ、あの！」

躊躇いがちな声をかけられた。振り向くと、つい先日見たばかりの顔があつた。特徴的な紫色の髪に細い身体の男性。金色の目がこちらをとらえている。

「ハークさん、ですか？」

何か言う前に名前を聞かれた。大人しく頷いて肯定の意を示しておく。彼はほっとしたように口元を綻ばせた。

「良かった……探していたんですが、見つからなくて」

この町の中を探しては見つからないだろう。ハークの家は離れたところにあるし、ここしばらく家でごろごろしていたし。

「えっと、何の用かな？」

話しかけられた理由の検討がつかず、訊ねてみる。

「あ、はい、その、先日のお礼と……あと、聞きたい事があって」「聞きたい事？」

何だろうか。男性の事に関してハークが答えられる事はないはずだが。

少々悩んで、相手をしてあげる事にした。どうせ暇なのだ、このくらいいいだろう。

「じゃああそこの喫茶店で話そうか。立ちっぱなしは辛いだろうし」提案すると男性はバツが悪そうに下を向いた。

「えっと……俺、金持っていないんですけど……」

「え、そうなの？ 安い物でよければ奢ってあげるよ？ あたしお金そんなに使わないし」

特にこれといった趣味があるわけでもないし、刀の手入れにちょっと使うぐらいで、金は余っていた。

「すみません……」

男性は本当に申し訳なさそうに謝った。

喫茶店の中は割と混んでいて、ハーク達は壁際の隅っこに追いやられた。窓際のいい席は既に取られた後だった。

「俺はデインギルデーンと言います。デインと呼んで下さい」

金色の目を持つ男性はそう名乗った。デインギルデーン。なかなか長い、意味がありそうでなさそうな名前だ。

「体調はもういいの？」

「はい。点滴を打ってもらったら、すぐ元気になりました」

ただの水分不足と栄養不足だった、とディンギルディーンは言った。医者への対応が良かったおかげですぐに回復できたとも。

「あのままだったら俺、死んでいたと思います。ハークさんは命の恩人です。助けてくれてありがとうございます」

「や、いいっていいって。そんなにかしこまらなくても」

アマンダが探したいと言いつき出さなければ助けなかったと思うし。

そういう意味で言えばアマンダがディンギルディーンの命の恩人だろう。

「それで、聞きたい事って何？」

訊ねると、ディンギルディーンは表情が曇った。

「……あの。俺が誰だか知らないでしょうか」

「へ？」

予想外の質問に少し思考が固まった。てっきり村の生存者などについて聞かれると思っていたのだが。

「えっと、それってどういう事？」

しばらくディンギルディーンは答えなかった。沈黙の間にウェイターが注文の品を持ってくる。下手に急かさないう方がいだろう、と運ばれてきたレモンソーダに口を付ける。口の中で泡が弾けた。

「記憶が、ないんです」

水底のように重い空気と共に零れたのは、そんな告白だった。

「——記憶喪失なの？」

「はい。その、どうしてあそこにいたのかも分からないんです。病院で目覚める以前の記憶がなくなって……」

嘘みたいな言葉だった。けれど同時にそんな感じもしていた。あまりにショッキングな事が起こったために記憶が欠落してしまうケースもあると知っている。想う悪魔に村を襲われ、他の村人が全員死んだとなればそれは相当にショッキングな事だろう。思い出したくないと思っても無理はない。

ディンギルディーンは自分を落ち着かせるかのようにアイスティーをかき混ぜた。カランカランと氷がグラスに当たる音が響く。

「うーん、でもあたしは何も知らないよ。あそこで君を拾ったのが初見だもん」

「……そう、ですよ」

弱々しい微笑み。無理をしているというよりは感情を押し留めているような、そんな顔。

「思い出したいの？」

自然とそんな問いが口について出ていた。ディンギルディーンは数回瞬きをして、頷いた。

「先生は思い出さない方がいい事もあるって言ってたんですけど、俺は思い出したいんです。何かやりたい事があった気がするんですけど——思い出せなくて」

「やりたい事？ やらなきゃいけない事じゃなくって？」

「はい。……俺自身もよく分からないんですけどね」

ディンギルディーンは苦笑した。

「でも分からないっていうのは気持ちが悪くて。だから、何か知ってないかな、って……」

「残念ながら知らないなあ」

何しろ会ったのはこれで二度目だし、名前だって先ほど知ったばかりだ。医者の方がディンギルディーンに詳しいだろう。

「分かっているんですけどね……ハークさんとは初めて会った感じがしなくて」

「へえ？」

「ずっと前にどこかで会った事あるような——」

それきりディンギルディーンは口を閉ざしてしまった。新手のナンパかと思ったが、違うようだ。

とは言われても、ハークの方は覚えがない。どこか親近感めいたものは感じるが、それだけだ。それ以上を感じはしない。

ただ、でも。手がかりがないからと諦めない姿勢が好きだなあ、とか思った。

ディンギルディーンと別れた後、ハークは病院へとやってきていた。この辺りで一番大きな、ついでにセンターの息がかかった場所。ディンギルディーンを連れてきたのもここだ。

ガラスで出来た自動扉をくぐると、すぐに目当ての顔が見つかった。

「や」

「おう、ハークか」

白髪まぎりのオールバックをがしと掻きながらこちらに目を向ける初老——というよりは中年終わりの、白衣を着た男性。長椅子に座り、人が少ないとはいえ仮にも病院の待合室で煙草を吸っている。

「看護婦さんに怒られるよ？」

歩み寄りながらそう言うと、男性はニヒルに口の端を持ち上げた。「いいんだよ、風の流れは計算している」

確かに、煙草の先から流れる紫煙は真っ直ぐに換気扇へと流れていき、他に溢れる気配はない。だったら問題ないのかもしれないが、一応椅子を一つ挟んで向かい合って座った。

この男はこういう男なのだ。屁理屈をこねて、問題がないように行動する。それが一部に慕われ、大多数に敬遠され、ハークが「おじいちゃん」と並ぶぐらい大好きな、モーリアという医者だった。

「おじいちゃん」がまだ生きていた頃、ちよつとした怪我や体調不良でもモーリアに看てもらった事を思い出す。どんな怪我でも医者に連れて行った「おじいちゃん」はかなり過保護だったと思うが、どんな怪我でもきちんと対応してくれたモーリアは医者鑑だと思った。

もつとも、病院の待合室で煙草を吸っているのを見ると考えを改めたくなるが。

「で、怪我をしているようにも見えないお前さんが何の用だ？」

ふはあ、と煙を吐き出すモーリア。全ての煙がモーリアの後ろへと流れていく。強い風が吹いている気配は全くないのだが、ちゃんと風は流れているようだ。

「うん、こないだ持ち込んだ子の事で」

モーリアは眉をしかめて何回か側頭部を掻き、思い当たったのかポンッと手の平で頭を叩くと大きく煙を吸い込み、吐き出した。

「デインギルデインの事か」

独白するように言うと、先程までのだらけた目線を一転、真剣な物に変えてこちらを見てきた。

「ちよつと来い。最近お前薬取りに来てないだろ」

「あ」

すっかり忘れていた。ここのところ、全く兆候がなかったから。

「ごめんごめん、忘れてたよ」

「ったく……話もついにしてやつから、ついてきな」

携帯灰皿に煙草を丸ごと放り込み、モーリアが席を立つ。ハークもそれに倣った。白い病院の廊下を歩き、モーリアの仕事室へと入る。

「座って待つてろ」

そう言われたので大人しく丸椅子に座った。プラスチックで出来ているという丸椅子は、木の椅子に座り慣れたハークにはどうにも合わない。もぞもぞと身体を動かしていると、すぐにモーリアが戻ってきた。

「ほら」

投げられた白い袋を受け止める。手の平大ほどの袋の中に、直径三センチほどの透明な円柱が入っていた。中に液体が入っているらしい、向こう側がぼやけて見える。

「これは？」

「無針アンブルって代物らしい。こう、強く皮膚に押し付ければ中の薬剤が注射されるから。こっちの方がお前にはいいだろ？」

気遣いについて苦笑してしまった。

ハークには少々暴走癖がある。普段はそんな事ないのだが、想う悪魔を大量に倒したり、白熱した殺し合いになったりすると危ない頭がカーツとなって何も考えられなくなるのだ。だからそういう時のためにモーリアに鎮静剤をもらい、常備していた。

が、折角もらってもきちんと思えるのは稀だった。錠剤は口に入らないし、注射は打つ方が危ないし、粉薬なんてもっと入らない。その内に使用期限がきて処分してしまう、という事がしょっちゅうだ。

その点、この無針アンプルならばどこに注射しても一定の効果を得られるのだろう。医者らしい気遣いというか、何というか。暴走する度に傷だらけになるアマンダの事を思うとありがたい。

「代金はお前の口座から引いたからな」

「え、先払いなの？」

「当たり前だろ。うちの病院じゃ必要ないんだよ、それは」

モーリアは新しい煙草を口にくわえ、火をつけた。ふはあ、と煙が口から溢れる。

「で、デインギルディーンなんだがな。結論から言くとありやあ人間じゃない」

「……へ、何それ」

どこからどう見ても人間の姿をしていたし、理性もばっちりあったが。

「点滴打って一時間も経たないで元気になりやがったんだぞ、あいつは。すぐに歩き回りやがったし。あんな回復力高い人間なんていてたまるか」

すごく自己中心的な理由だった。

「じゃあそれは横に置いて、記憶喪失って本当だと思う？」

一番気になっていた部分を聞いてみる。モーリアの側頭部がまたガシガシと掻かれ、整えてあった髪が乱れ始める。

「本当だろうな。精神関係は俺の専門じゃないが。ただ——」

一端言葉を切り、深々と煙を吸い込むモーリア。はああ、とゆっくり吐かれるそれが、ため息のようだった。

「あいつは思い出さない方がいいと思う」

「へえ？」

面白い言葉に首を傾げる。

「それはまたどうして？」

「勘だな。あいつの記憶喪失はお前の暴走と似た匂いを感じる」

ふー、と細く吐き出される煙。勢いはいいが、ハークのところまでは届かず換気扇へと吸い込まれていく。

「思い出さない方がこれからのあいつのためだろ。お前が暴走しない方がいいのと同じでな」

「ふうん」

何となく諦めに似てるなあ、と思った。ハークの暴走だって何とかなるのだ、だったら思い出してもいいだろうに。

「どっちみち専門医に看てもらうにしても金がかかるからな。当分は俺の助手として仕事をしてもらうさ」

「え、先生そんな甲斐性あったの？」

「……お前は俺を何だと思ってるんだ」
睨まれてしまった。

「ただいまぁー」

「あ、お帰りなさい」

帰宅してみれば既に夕飯の支度が始まっていた。いい匂いが鼻腔をかすめる。

「今日のご飯は何ー？」

「ホワイトシチューです。いいお野菜が手に入ったので……」

夕飯が出来上がるまでの間、刀の手入れでもしようかと工具入れに手を伸ばした。

と、

「……お？」

突然電話が鳴った。けたたましい呼び出し音が室内に響く。鍋の前にいるアマンダがこちらを見たが、軽く手を振って自分が出ると示す。

こんな中途半端な時間に誰だろうか。センターなら朝方に連絡を出すはずなのだが。

「はい、どちらさまですか？」

『ハークか！？』

「あれ、先生？」

かけてきたのはモーリアだった。切羽詰った声になんかあったかと首を傾げる。

「どうしたの？」

『すぐに町に戻ってきてくれ、悪魔が——』

「へ、悪魔？」

ブツツと通話が切れた。ツー、ツー、と電子音が聞こえてくる。

悪魔。つまりそれは――

「……ハークさん？ 何の電話で」

「アマンダ、夕飯は後、町に行くよ！」

「え？ え、あ、はい！」

ハークの声からただならぬ事態を察したのだろう、アマンダは問い返したりなどせずシチューの火を落とした。それぞれの武器を持つて家を出る。

「モノレールを使いますか？」

「動いていないと思う。ジープを出そう！」

小屋の横に止めてあった、ジープにかけてあった布を取り払う。ここしばらく使ってなかったがアマンダが手入れをしていたらしく、綺麗だった。助手席に座り、操作はアマンダに任せる。

ここから町までそれなりにある。ジープで間に合えばいいのだが

町は酷い有様だった。硬いはずの建物は破壊され、建物の下敷きにされた人々の身体の破片が見える。

「うわ……」

慣れているはずのハークですら目を覆いたなくなった。こんな惨状、見た事がない。

ジープで町中を走るのは危険そうだったので、町から少し離れた場所に停め、進んでいく。昼はあんなに活気があったのに、今は戦争後のように死体ばかりだ。

流石にこれでは生存者を探す余裕がない。町を襲った想う悪魔が複数なのか単体なのかは分からないが、太刀打ち出来るかどうか。

「……とりあえず病院に行こう」

せめてモーリアの生死ぐらいは確認しなければ。アマンダは真っ青な顔のままこくと頷いた。彼女のためにも早く済ませた方がいい。

……そういえば他の悪魔の狩人達はどうしたのだろうか。町に住んでいる者やセンターの世話になっている者はかなりいたはずだ。彼ら全員が全員外出中だったとは考えられない。

廃墟に近い町の中を早足で進む。そんなに長くない道が長く感じ

られた。

ようやくと病院に辿り着いた時、思わずハークは奥歯を噛んでいた。他よりも一層酷く、天井から倒壊した、もはや瓦礫としか呼びようのない残骸が転がっていた。うめき声すら聞こえない。あちらこちらから腕や足が生えている。

「アマンダ、ついてこれる？」

「は、はい」

想う悪魔がいるのなら離れない方がいい。ハークは身軽な格好だが、アマンダは長いスカートを履いている、起伏が激しいここでは動き辛いだろう。アマンダは裾を持ち上げ、何とか動きやすい格好を確保したようだ。一応手を差し延べ、瓦礫の上を歩いていく。

玄関と思しき場所を通過して、受付横の通路を曲がり、進む。しばらく歩けばかうじて四角く残っているモーリアの部屋があった。他に比べ、破損が少ない。

そういえば昔、「一番丈夫そうなところを分捕った」と話していた。当時は入院患者に譲ってやれよ、と突っ込んだが、今はそれでよかったと思った。

側面からは入れそうになかったので、何とか歪んだ扉をこじ開けた。薬品や資料や破片が散らばる部屋に、モーリアが倒れこんでいた。

「先生！」

アマンダの手を離し、駆け寄って抱き起こした。頭から血が滴った。考え事をする度に乱れていくオールバックが赤い液体に浸っている。

「先生、先生！」

まだ温かい。揺さぶらないように呼びかけ続けると、モーリアは薄っすらと目を開いた。

「……ハーク、か」

「先生、大丈夫！？」

「駄目、だなあ。お前が呼ばなきゃ、もうちょっとで死ねてたんだ

が……」

そんな言葉は聞きたくなかった。耳を塞ぎたい衝動に駆られる。血がまみれた口元を歪ませ、モーリアは晒った。

「本当……お前は……」

口を閉ざす。何か言いたくても何も言えない。生きてほしくても医者である本人が無理だと言っているのだから、無理だろう。

諦めたくない。でも、諦めるしかない。

「なあ」

呼吸音しか聞こえない部屋の中で、ぽつりと遺言が落とされる。

「デインギルディーンを頼む。あれはお前と似てるから……頼む……」

……『薔薇の獅子』なら、お前達、を……引き出しに、……」

クレツシエンド。徐々に小さくなっていく声を聞き逃さないように唇を真一文字に閉じる。

「……煙草、吸いたいなあ……」

まぶたが下ろされる。それっきり、モーリアの呼吸は途絶えた。

抱き締めていた。血がにじむ白衣に顔を押し付ける。心音の聞こえない温かい胸が悲しかった。

不思議と涙は出なかった。悲しいのに。悔しいのに。目頭が熱くなったりはせず、ただただ物悲しい。そういえば「おじいちゃん」が死んだ時も泣かなかったな、と思い出した。

顔を上げた。いつまでも悲しんでいられない。そつと床にモーリアを横たえ、立ち上がった。

「あ……もういいんですか？」

「うん。遺言を果たさないかね」

と、そこでアマンダに目が行った。部屋の入り口に立つ彼女の目は少し赤くなっていた。

「泣いてた？」

「そこまじやないんですけど……何かちょっとだけ、目が熱くなっちゃって」

「辛いのはハークさんなのに」と言う彼女に対して何も思いはしなかった。泣いてもらえてモーリアも嬉しいだろう、ぐらいにしか確かに悲しいし苦しいが、ここで立ち止まってはられない。

物が散らばる机の引き出しを開けた。歓楽街にある店の割引券や、パズルのように詰められた煙草の箱に混ざって、銀色のカードが入っていた。

取り出して見る。手の平におさまるサイズのカードには、蒼い獅子の絵が描かれていた。隅の方には「薔薇の獅子」と文字が入っている。

それを大事にポケットにしまった。ついでにモーリアが愛喫していた銘柄の煙草を一個と、彼が使用していたライターも持って行く。吸うつもりはないけれど、思い出の代わりに。

「よし、もらうもんもらったしディーンを探そうか」

気持ちを切り替える。しかしアマンドは首を傾げた。

「あの、ディーンさんってどなたですか？」

「あ。そういえば知らなかったっけ」

アマンドにはまだ話していなかった事に気付いた。それは戸惑っても仕方ない。

「歩きながら話すよ。とりあえず行こうか」

「はい」

いつまでもここにはいられない。彼の亡き骸を置き去りにして、二人は病院を後にした。

一通り町を巡って見つからなかったら帰ろう、という事になった。この瓦礫の山を全てどかして死亡を確かめる、というのは流石に出来ない。妥当なところだろう。

「おい、ディーン！」

名前を呼びながら町を歩く。残骸だらけの町は本当に静かで、生きている人間なんていなさそうだった。

そうやって進んで行くと、比較的倒壊が少なく瓦礫もない中央広場の、こんな状況でも動き続ける噴水の前に人影が二つ見えた。

片方はディンギルディーンだったが、片方は子供に見えた。前も後ろも長い金色の髪が特徴的な、赤いずきを被った少女。ずきと同じ色のミニスカートと、そこから少しだけ見えるドロワーズが愛らしい。彼女は腕に大きなティディベアを抱え、脇に大きな革張りのトランクケースを置いていた。

それだけだったら二人とも生存者だと思っただが、様子がおかしかった。ディンギルディーンは親の仇でも見るような目で少女を見ているし、少女は非常に冷めた目でディンギルディーンを見下している。一瞬声をかけるのをためらうぐらい、敵意に満ちていた。

躊躇って、それでも声をかけた。

「ディーン！」

ディンギルディーンが、それに一拍遅れて少女がこちらを見る。

彼の目は驚きに見開かれたが、彼女の目は冷ややかなままだ。

「ねえ、何が――」

「来るなっ――!」

ディンギルディーンが叫ぶのと辺りからけたたましい音が響いたのはほぼ同時だった。

両脇の瓦礫を押しつけて現れたのはティディベアだった。だがその大きさは通常のティディベアのサイズをはるかにしのぐ。一般的な成人男性よりも三回りほど大きい。

「え……」

突然の事で呆気にとられてしまった。ティディベア達は全員が全員、黒いつぶらな瞳をこちらに向けている。それが――とても、怖かった。

「生きてる人は要らない」

ぽつりと少女が呟く。

「――死んじゃえ」

ティディベア達が動き出す。ハーク達めがけて襲い掛かってくるのと、

「Number - Seventh - Charriot!」

ディンギルディーンが叫んだのは、またほぼ同時だった。

ごう、と風の音がした。直後、襲い掛かってきていたはずのティディベア達が例外なく吹っ飛ぶ。まるで人形劇のように綺麗に。現実離れした光景にやっとハークは我に返る事が出来た。

「ディーン!」

「きゃ、きゃあ!？」

名前を呼ぶとはっとしたようにこちらに向かって駆け出してきた。それを確認してからひょいとアマンダを抱え上げる。さっき歩いていただけでも転びそうだったのに、走って逃げるなんて無茶だろうと思ったからだ。ついでに、刀をアマンダに握らせておく。

町の外に向かって走る。あれは無理だ。勝てない事はないだろうが、数が多い。アマンダを守りながら戦うのは難しいだろう。

何より正体が分からなさすぎる。少女は想う悪魔というには綺麗だが、人間とも思えない。第一町を壊した奴が誰かも分からない。もし犯人があの子だとしたら——とんでもない事だ。

走り続けていると、どすんどすと振動が来た。何かと後ろを見てみると、

「げっ」

合体したのか何なのか、全く持って分からないが巨大なティディベアが追いかけてきていた。成人男性よりも大きいというレベルではない、二階建ての家屋とほぼ変わらない大きさだ。大きいにも程があると思う。動きは緩慢だが、歩幅は広い。必死で走らなければすぐに追いつかれてしまいそうだ。

度々振り上げられる柔らかそうな手が瓦礫の山を崩し、こちらに破片を飛ばしてくる。それらを器用に避けながら、何とか町の外が見えてきた。

「ディーン、こっち！」

ジープに向かって走る。アマンダを運転席に乗せ、自分は助手席に乗る。ディンギルディーンはジープに戸惑いながらも後部座席に転がり込んだ。

すぐにエンジンがかかる。行き先の指定はしていないが、アマンダの事だ、家に向かってくれるだろうと思った。

ジープが走り出す。速度制限がなければ人間の足で追いつく事はない。ちらりと後ろを見れば、諦めたのか、巨大なティディベアは町の入りに突っ立ってこちらを見送るのみだった。

ほとほと戻ってきた巨大なティディベアに少女は抱きついた。

「ありがとう」

ぼつりと呟くと、ティディベアはしゅるしゅると元の大きさに戻っていった。そのまま少女の腕の中におさまる。

「終わったのか？」

声をかけられ、振り向く。廃墟となった町に一人の男が立っていた。真っ赤な逆髪さかがみが特徴的な、血のように赤い目をした男だ。ただ右目は眼帯で覆われていて、右頬に僅かに火傷の跡が見える。

革で出来たジャンパーを羽織った彼は、ひよいひよいと身軽に少女へと近付いてきた。光沢のある黒いズボンに取り付けられた銀色の鎖が、動きに合わせてチャラチャラと鳴る。

「フィオニトムおにいちやん」

男——フィオニトムを視認して、少女は頬を緩めた。花がほころぶような微笑みに、あつという間に間近まで寄ったフィオニトムは、しゃがみこんで少女と視線を合わせ、ガシガシと頭を撫でてやった。「どうだ？ 上手くいったか？」

「うん。人間は全員殺したよ」

少女は恐ろしい事をサラツという。フィオニトムはいとおしくてたまらない、といった風に目を細めた。

「あ、でも……」

少女が表情を曇らせる。

「どうした？」

「うん……あのね、三人かな、逃げられちゃったの」
ティディベアを抱く腕に力がこもる。ふわふわの毛皮があご下に密着した。

そんな少女を安心させるように、フィオニトムは優しく髪を撫でた。慈愛に満ちた微笑みが少女に向けられる。

「大丈夫。これだけ殺せば充分だ。三人ぐらいどうって事ないさ」
次第に少女の瞳から不安の色が消えていく。

「そうかなあ？」

「ああ、そうだよ」

「……パパ、ムーの事褒めてくれるかなあ……」

「もちろん褒めてくれるさ」

少女は嬉しそうに微笑む。「パパ」に褒められるその時を想像し、心が躍っているのだ。少女の気持ちが上がいた事を確認し、フィオニトムは立ち上がった。

「よしっ、じゃあ死体を回収しちゃおうか。あっちの方にトラック停めといたから」

「うん！」

元気良く返事をして少女はまだ大きなティディベア達に指示を出してまわる。瓦礫がどかされ、ミンチとなった死体も全て拾われトラックへと運ばれていく。

少女にばかり働かせられない。自分も動こうと思ったその時、耳につけたピアスがチリリりと鳴った。一センチ四方のダイヤ型にカットされた青ガラスを指で挟む。

「はい、フィオニトムです」

「ああ、ようやく繋がったか」

骨を伝って聞こえてきた声に思わず背筋を伸ばした。心臓がバクバクと過剰な運動を始める。距離に関係なく、周りに聞かれる事なく会話出来るこのマジックアイテムは便利だが、相手が相手だと心臓に悪すぎる。耳に、脳に、声が響きすぎる。

「え、えーっと、何の用ですか？」

「バレていると思うが、一応平静を装って訊ねた。」

「ああ……首尾はどうだ」

「調整はバッチリですよ。何か三人ほど逃げられたみたいですけど、他は皆殺しです。これでリーダーの研究も進みますね」

「そうか」

淡泊な返事が返ってくる。いつもの事だ、フィオニトムは気にせず言葉を続けた。

「帰ったら褒めてやってくださいよ。あと、俺にもご褒美下さい」

「……この間もしてやった気がするんだが」

「いいじゃないですかー、その分成果は出しててるでしょ？」

ティディベア達が作業する中を進む。飛んでくる破片に当たらないように上手く避けながら歩いていると、比較的形が残っている建物が見えた。いや、建物ではないか、恐らくは建物の一部だ。

「……仕方ない。ハフニウムの相手をしてからだ」

「えへへ、よろしく願います」

瓦礫の山を乗り越え、開きっぱなしの扉から中を覗き込む。覗いて、にい、と笑っていた。

「リーダー、今、五体満足の死体を見つけたんですけど——」

——ディンギルディーンは噴水のふちに腰掛けていた。モーリアが「今日は外で食べる」と言い出したので、彼の業務が終わるまで待っているのだ。

モーリアには感謝しても感謝し足りない。素性も知れぬ男を預かり、しかも雇ってくれるというのだから。社会で生きていくにあたって金銭はどうしても必要になる。

ディンギルディーンはそれに加えて、専門医に自分の記憶喪失を見てもらおうと考えていた。モーリアの話に寄れば、信用出来る医者は何人かいるが、誰も診察料が高く、ついでに一文無しを厚意で見てくれるようなお人よしいはないとの事だった。

どうしようか途方に暮れていた時にモーリアが面倒を見ると言ってくれたのだ。ディンギルディーンがひとり立ちするまでは助手として雇い、住む場所も食べる物も提供してくれると。態度は悪いが良い人だと、その時思った。

とはいえずぐに助手に、というわけにはいかない。ディンギルディーンはド素人で、さらには記憶がない。一通り薬の名前と効能、病院内で使う書類のフォーマット、そういった仕事をするのに必要な事を覚えるまでは働けないと言われた。

当たり前だろう。何も知らない素人を即日使う専門業者などいるまい。早く覚えて少しでもモーリアの役に立ちたい、それがディンギルディーンの当面の目標になっていた。

ぼんやりと人通りを眺めながらモーリアを待つ。金属で出来た建物は冷たいが、人々はそうでもないようだった。暗い表情をしている人間はごく少数で、皆が皆、明日への希望を持っているように見えた。

ああ、羨ましい。俺も早く何がしたかったのか思い出したい。それは一種嫉妬にも似た、確かな羨望だった。

ふと、視線を感じる。そちらを見れば赤い頭巾を被った、長い金髪の少女がいた。彼女の細い体格には不釣り合いな大きな革張りのトランクケースを持って、脇に少女の身の丈の半分以上もある大きなティディベアを抱えて、よろよろとこちらに近付いてくる。

彼女はどすんとディングルディーンの足元にトランクケースを置くと、につこりと微笑みかけてきた。

「こんにちは」

「……あ、ああ。こんにちは」

少女はそのまま上機嫌にディングルディーンの横に座った。彼女の膝の上にはティディベアが置かれた。

一体誰だろう。病院に来ていた子供かもしれないが、記憶にない。記憶を失う以前に知り合ったのだろうか。

「良い天気ですね」

「あ、ああ……」

よく分らないが、ざわざわする。少女がこちらを見る度に心のどこかがざわついた。

コイツハ敵ダノ殺シテシマエノ喰ライ尽クセ

そんな、おかしなノイズが聞こえてくる。こんな人畜無害で可憐な少女の、どこが敵でどこが殺すべきでどこが喰らうべきなのかと、自問自答する。

少女はばたばたと脚を動かす。ミニスカートがひらひらと揺れ、ドロワーズがちらちらと覗く。それは全く不純な要素を感じさせない、可愛らしい動作だった。

彼女から視線をそらし、噴水の側に設置された時計塔を見上げる。時刻はもうすぐ五時半。モーリアの仕事が終わるまでまだ少しあるだろうか。

カチツ、と長針が動く。先端が丁度6を差す。それと同時に少女が立ち上がった。

「時間……」

そんな事を呟き、少女はトランクケースを開けた。トランクケー

スの中には、少女が抱えているティディベアよりも二回り小さいサイズのティディベアがたくさん詰め込まれていた。

「出番だよ」

友達にとっておきのイタズラの内容を教えるような声色で囁きかける少女。するとトランクケースのティディベア達が次々と起き上がり、外に出だした。到底人間業とは思えない光景に思わず目を取られる。

早くシロ／何ヲシテル／殺ルナラ今

耳鳴りのようなノイズを必死に無視する。思えば、殺すまではいなくともその時点で押さえつけていれば良かったのだ。

「生きてる人は要らない」

少女は晴れやかに微笑み、

「皆死んじゃえ」

そんな、残酷な命令を口にした。

「そしたらぬいぐるみ達が巨大化して……ああ、なったんです」

あの後、巨大ティディベアから逃げ切り、一行はハークの家へと来ていた。緊張の糸が解け、空腹を思い出したらしいハークとアマンドは少し遅い夕飯を食べていたが、ディンギルディーンはとてもそんな気分にはなれず、水を少し飲んでいるだけだ。

あんな事があつた後できちんと食事を取れる二人は強いな、と思った。食べなければもたないと理解していても、胃が受け付けない水を飲み込むだけで精一杯だ。

……かいつまんで話しただけでも辛い。吐き気がこみ上げてくるのをこらえながら、それでも話して、ようやく話し終わった。後はハーク達も知る話だ、ティディベア達は巨大化し、町を襲った。見た目の割りに俊敏な彼らは次々と建物を破壊し——そして、あの惨状が出来上がった。

「ふうん……あの子がどの誰かって事は分からないって事？」

「はい」

見ていると変なノイズが聞こえてきたが、何のヒントも与えてくれなかった。信じられるとも思えなかったし、ハーク達には言っていない。

ハークは何か考えているようだった。視線はあらぬ方に向いているが、手はせわしなく動き、シチュー皿の中身がどんどん減っている。零す事もなく余所見をしたまま食べられるのはある意味すごいな、と思った。

「そーいえばさ」

顔がこちらに向けられる。群青色の目にとらえられると、少しばかり萎縮してしまう。気さくで話しやすいのに、ディンギルディーンは彼女に対してどうしても身構えてしまいがちだった。

「『薔薇の獅子』って知ってる？」

少ない記憶を探る。モーリアがそんな事を呟いていた気がするが、詳しくは知らない。首を横に振ると、ハークは再び視線を宙に向けた。同時に空になったシチュー皿をアマンダに突き出す。慣れたものらしい、アマンダは特に何も言わず、シチューのおかわりをよそいに行った。

「そっか、知らないのかあ……仕方ない、エンゲルにでも会いに行かなあ」

似合わない、苦々しい表情だった。そんな彼女の前にアマンダが新しいシチューを置く。

「じゃあ、集都しゅうとに行くんですか？」

「そうだね。ディーンの体調が良さそうでアマンダも動けるんだったら明日にでも行こっか。どっちみちセンターに報告しなくちゃいけないし」

「……あの、集都しゅうとって何ですか？」

「ん、ああ、知らないのか」

聞いた事がない。まだ町の地理もよく覚えていない段階で、「この面全体は今度でいいだろう」とモーリアは教えなかった。名前からどういふところか何となく想像がつくが。

ハークはアマンダを見た。視線を受けて、電話が置かれた収納箱の中から地図が取り出される。ディンギルディーンの両手で覆いきれれるほどの大きさのそれに描かれた黒い模様の、ある一点をアマンダは指差した。外海にはやや遠い。

「ここが今私達がいるところです。それで、集都は……」

つ、と指が動かされる。模様のほぼ真ん中で止まった。

「ここです。この面で最も大きな町で、センターの本部もここにあります」

「ここら辺でセンターの支部がある町はあそこだけだったからね。

……あー、わざわざ本部に行かなきゃいけないとか面倒だなー……」
がじがじとスプーンを噛むハーク。基本的に食事マナーが悪い人なのかもしれないと、何となく思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0723i/>

想う悪魔

2010年10月10日05時17分発行